

山桜の里 戸赤

携帯圏外解消をきっかけに

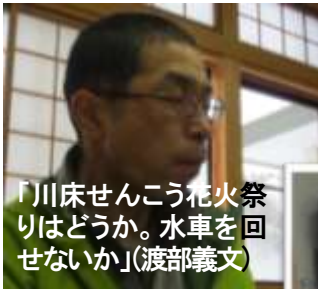
やまざくら学校

土・日開店を検討

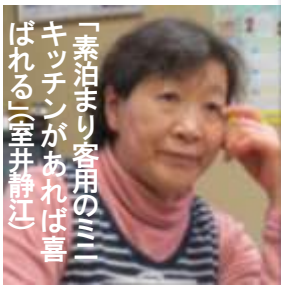


携帯の開局間近か

NTTドコモ携帯アンテナ戸石の元学校校庭に設置小屋、赤土は届かない



「川床せんこう花火祭りはどうか。水車を回せないか」(渡部義文)



「素泊まり客用のミニキッチンがあれば喜ばれる」(室井静江)



村おこし実行委員役員の年始会、自分の身の回りの変化と地域の条件が徐々に変わる中で何が出来るか、打ち解けた話し合い(1. 8)



「地域おこし協力隊の補助事業も入れてみてはどうか」(渡部恵子)

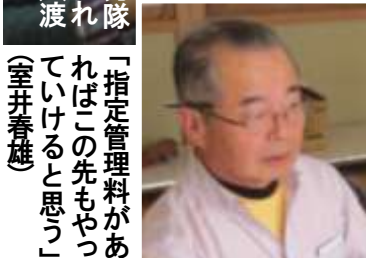
やまざくら学校の運営や、村おこし事業のこれからをテーマに、一月八日実行委員会役員は新年会を催し抱負など語り合いました。学校運営の不足分を町にお願いした件は見通しが良いこともあり、冬期間を除き土日十時から午後三時まで厨房を活用し売店を開くほか、素泊まりのお客さんに流し、IHヒーター、レンジなど使ってもらえるようにするなど、携帯圏外解消を機に、一歩前進の意見が出されました。



「やまざくら学校多目的ホール後ろの部屋を整理し、事務室を客に開放しよう」(星隆雄)



「婦人消防隊もなくなりそう。受け皿を考えないと」(渡部夕子)



「指定管理料があればこの先もやっていけると思う」(室井春雄)



「味の基本は水だ。ここはいいものを売りにできるかもしれない。」(室井実敬)



「今年退職。山桜学校の土日営業に協力できるかも。」(小椋由典)



△「団員でなくても消防ポンプ使えるようにしないと守れない」(渡部利男)

消防団員はあと二年でいなくなるので、婦人消防隊の存続も合わせ自分の村は自分で守る話題は緊急課題。

【木地の学習No.72】大沢集落の隣に、大小屋と数年前に廃村になった元小屋がある。元小屋は三軒あったが、すべて山から平野部へ降りた。平姓二軒、赤城姓一軒で、平友義氏の母親は九〇歳を越して、なお記憶のしっかりとした人である。この家付娘のおばあさんは「私の家は平家の落人で、木地氏をやっていたと聞いている」と話し、また元小屋の下流にある大小屋の佐藤二郎氏も九〇歳を過ぎた人であるが、この方も「元小屋に昔木地挽がいたと伝えられている。大小屋の集落ができる前の話で、平家落人の伝説もある。大小屋集落については、木地小屋であったという話は聞いたことがない」と話してくれた。しかし、大小屋もまた木地小屋であった。山形大学の古文書は、岩倉村嶽谷(現・西置賜郡飯豊町)の三太郎について、「私は先祖より木地挽をしてきたが、今はこの嶽谷で田畑を開き永住している」とし、先祖から現在に至るまでを大小屋→広川原→岩倉入下川原→岩倉嶽谷と記している。吾妻山麓の木地業は、近世中期ごろに衰退し、代って西置賜郡の飯豊町、小国町、川西町で盛んになってくる。これらの地は、土着の農民木地師、吾妻山麓からの移動木地師、さらに文化期には信州からやって来た木地師であり、殊に飯豊町は、福島県山都町川入とは山一つ隔てたところでもあったので、会津木地師との交流もみられた。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (続く)



戸赤長寿会 27
人中 19 人参加
した温泉保養。

欠席者 8 人の中で施設入所の 1 人含め寝
たきりはない。みんな生涯現役だ。

戸赤長寿会は

生涯現役



(28.12.6 民宿沼袋)



歳 の 神

(赤土)

一月十四日の歳神。年々人が減り今までのように高くできるかどうか心配した。今年も無事できた。年祝、家族の厄落として、お神酒がふるまわれミカンまきが あった。

豆花

栽培 12月7日
2回目集荷実績

- 小豆 43.5 kg
- ささぎ 8.4 kg
- A 花豆 49.3 kg
- B 花豆 15.4 kg

戸赤特産の花豆。A 級 474・3 kg 今年もパイの原料を確保。



株間を広くし豊作だった花豆畑(戸石川向)

八常時居住して老人会に入世帯のうに十人三のい



小椋マサミさん

ちょっと
いっぴく

【28.12.6 老人会の温泉保養で】

れきの
ひとコマ

新しい道路の姿がまぶしい(29.1.8)



(ストーリー性のある村づくりのために[No.40]伊南川流域の弥生遺跡の中で、古式の段階では馬捨場遺跡が、普及期のものとしては上ノ田遺跡と白沢遺跡が最上流に位置し、これより上流の館岩村や檜枝岐村からは今のところ発見されていない。ちなみに大川流域では田島の上ノ原遺跡が最上流に位置する。南会津の弥生遺跡を概観すると、二ツ釜から川原町口式にかけて遺跡の急激な増加が認められ、下郷では柏木原や上ノ平・雑根・的場の各遺跡、田島の宮ノ沢や上ノ原の山間部までに及び、遺跡の規模・出土量共に充実をみるが、それ以降急激に遺跡数を減じている。このような傾向は会津地方各地の状況と酷似している。 弥生時代以降 弥生時代二ツ釜から川原町口式期の急激な浸透のあと、弥生時代末葉とそれに続く土師・須恵は、断片的な資料が他の時代に混じって僅かに出土するのみであった。平成三年当時下郷で土師・須恵を出土する遺跡は道州遺跡など一二遺跡であり、古墳時代の遺跡・遺物はきわめて少なく、僅かに南会津では田島の上ノ原遺跡から関東の鬼高期式の土師器が採集されているが、他は九世紀前葉から中葉のものであった。しかし、左走遺跡の発掘調査により、コーナー付近にカマドをもつ平安時代の方形の堅穴住居跡が検出された。同様の形態の住居跡は加藤谷川流域に営まれた小規模集落の特徴であり、戸石川流域の瀧平遺跡や豊後海遺跡からも方形の住居跡が検出されている。南倉沢遺跡の住居跡からは須恵器・土師器のほかに金属製品や円筒形土器が出土しており、]会津平野と比べても遜色なく、山間部の開発が急激に進んだものと考えられる。

(「下郷町史」第7巻通史編(発行・下郷町)より出典) (続く)